ヨシフ・ブロツキー詩／イーゴリ・オレイニコフ絵／沼野恭子訳『小さなタグボートのバラード』

東京外国語大学出版会　二〇一九年十一月

この絵本の主人公は小さなタグボート。名前はアンタイオス。サンクトペテルブルクの港で働いている。異国からやって来た大型船を曳くのが彼の仕事だ。

前半はアンタイオスの楽しげな職場の様子が綴られる。港では「超重機（クレーン）のレース模様」が彼方に見え、乗組員たちがタグボートを動かす。ネヴァ川の河口は空も海も青く、煙や雲が漂っている。

だが大型船が現れる後半から、アンタイオスの異国への憧憬が切々と語られる。大型船は遠い海からやって来る。彼らはアンタイオスの行ったことのない南の海、聞いたことのないオウムの鳴き声を知っている。詩が語る異郷は美しく、だからこそ憧れは真に迫ったものになる。だが大型船を見送りながらアンタイオスは繰り返すのだ。「ここに残らなくちゃならない。」

アンタイオスには生きる場所があり仲間もいる。自分の仕事にやりがいも感じている。だがそれ以上に遠くの国からやって来る大型船のように、ここではないどこかへ行ってみたいと切望している。そしてそれが叶わないのは彼が小さなタグボートだからだ。

ここでは大人になったときに私たちが遭遇する世界が描かれている。たった一人の力のちっぽけさを痛感し、夢を諦める人間の姿だ。だがそうせざるを得ない世界を厭っているわけではない。アンタイオスには故郷に対する愛情があり、何より彼は必要とされている。だが憧れは止み難く、自分を誤魔化すようにここにいる理由を繰り返す。

本文の詩を書いたヨシフ・ブロツキーはレニングラード（現サンクトペテルブルク）に生まれ、一九六二年に児童向け雑誌にこの詩を発表した。その十年後である一九七二年にアメリカに亡命することになる。

さて、挿絵を担当したイーゴリ・オレイニコフ氏はこの哀愁漂う詩に美しいイメージを与えた。私たちがアンタイオスの働く港の様子を生き生きと想像することができるのは、この詩に添えられた絵が力を貸してくれるからだ。ネヴァ川からはイサーク寺院が見え、街並みが靄の中から浮かび上がる。ペテルブルクを知る者も知らない者もこの街の美しさを挿絵から感じ取るはずだ。

どのイラストも魅力的だが、白い朝靄の中で大型船を送り出すシーンが特に印象に残る。タグボートはスフィンクスと共に彼方を見つめている。スフィンクスの傍らには一羽のカモメがおり、そのカモメも同じ方向を向いている。この挿絵と共に詩は語る。

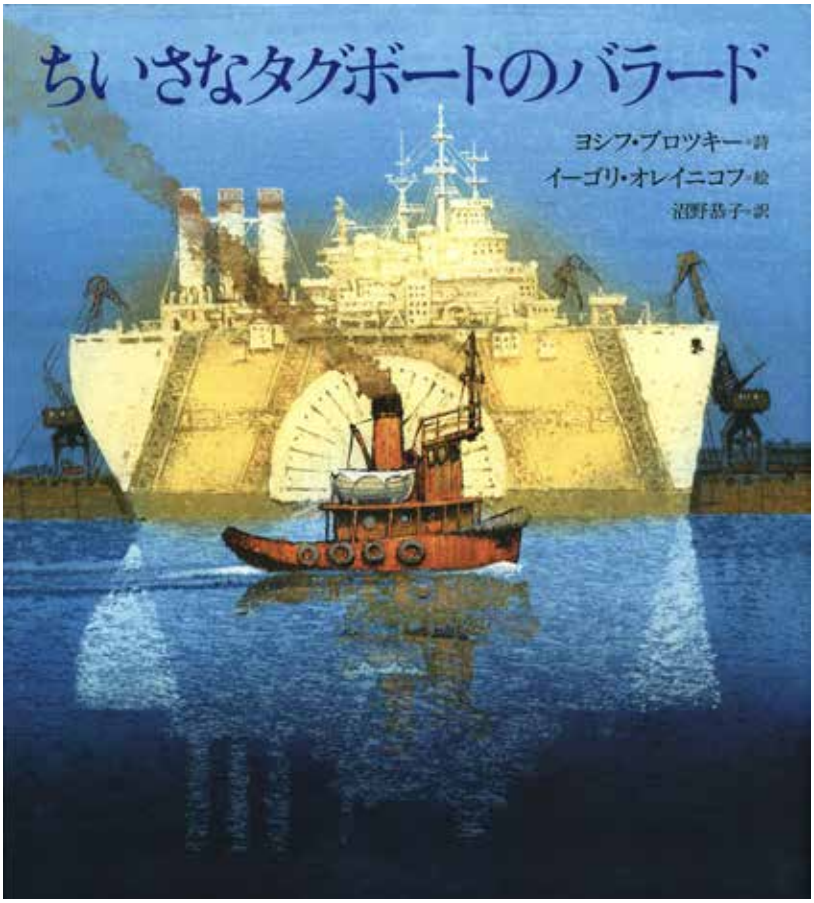
わかれるのは初めてじゃない
遠くへ姿を消してください。

だれかがこの地に
残らなくちゃならないんだもの。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

石造りのスフィンクスはタグボートよりも多くの船を見送って来ただろう。悠久の時を経たスフィンクスと儚い命のカモメとタグボート、彼らは街と一体化している。立ち去る者を見つめるサンクトペテルブルクの姿がこの挿絵に凝縮されている。

サンクトペテルブルクは比較的写実的に描かれているが、来訪する大型船は夢を見ているような描写に溢れている。大型船にはアフリカを思わせる仮面や文様が散りばめられ、甲板が森になっている船もある。まさしく「ここではないどこか」からやって来た船たちだ。オレイニコフ氏は舞台がサンクトペテルブルクであるという現実感と詩の幻想性を見事に両立させた。

是非とも絵も楽しみながらタグボートの運命を見届けて頂きたい。

（井伊裕子）